

中世末期のアラ系感動詞

—— 各形式の成立と定着に関する試論 ——

深 津 周 太

1. はじめに

16世紀の日本語に、いわゆる〈詠嘆〉を表わす感動詞として、アラ／アレ／ヤラ／ヤレという四形式が観察される。これらの典型的な出現の仕方を、次の(1)～(3)にそれぞれ挙げる。

- (1) a. コ、テ飛衛カアラウレシヤト云テヲトツテ教ヘタトアルソ
(蒙求抄／三 43 ウ)
b. あれ／＼おかしや
(醒醉笑／七 260)
c. ヤラミゴトヤト云イ心ヲ喜テナクサム物ノ類ハミナソナワツテアルソ
(詩学大成抄／七 8 ウ)
d. ヤレ不思議ヤト思ヒタルガ、ヤガテ推量シタソ (三体詩抄／三・四 39)
- (2) a. あらうつくしのぬりつは笠や
(閑吟集、48 / p154)
b. ヤラ面白ノ景ヤトテ
(三体詩抄／一・三 7)
- (3) a. あら今は辛い命を助かったものかな (天草版伊曾保物語／494)
b. アレ上手カナソ
(山谷抄／四 66 ウ)
c. ヤラ思ヒヨラヌ声カナ
(中華若木詩抄／p233)
d. ヤレ不吉ナル声カナ
(三体詩抄／二・三 34)

これは、中川(2001)が整理する中世語のアラとその後続文が形成する典型的な共起パタン^(注1)に、よく一致する。

- (4) a. アラ＋形容詞・形容動詞語幹＋ヤ ……(1)に一致
b. アラ＋形容詞・形容動詞語幹＋ノ＋名詞＋ヤ ……(2)に一致
c. アラ～カナ ……(3)に一致

(1)～(3)のように、同じ共起パタンを以て用いられるアラ／アレ／ヤラ／ヤレは、16世紀において異形態の関係にあると言えよう。本稿では、(4)の典型的共起パタンとそれに準ずるものを、^(注2)‘基本パタン’と呼ぶ。また基本パタンを以て用

いられるアラ／アレ／ヤラ／ヤレを‘アラ系感動詞’と名付ける。

アラ系感動詞の共時的な記述およびその一群が構築される過程の解明自体、感動詞史の課題のひとつである。また、アレ／アラといった感動詞は現代語にも存在するが、それらは指示詞が感動詞化したものであることが無批判に受け入れられ、アラ系感動詞との関連は看過されてきている。この問題に対するアプローチの前提的な議論としても、中世におけるアラ系感動詞の在り方を分析しておく必要がある。

以下、アラ系感動詞それぞれの成立過程と、その定着の度合に差が生じる要因について考察する。次節では当時の辞書記述や用例分布を基に、各形式の定着の度合を確認する。3節で他三形式の母体となったと考えられるアラの出自について述べ、そこから同じくーラ形であるヤラが生じた可能性について考察する。4節では、ーラ形のアラ／ヤラに対するーレ形のアレ／ヤレが産出された過程を推察する。また、このうちヤレのみが定着した理由の解明を試みる。5節にはアラ系感動詞の発生・定着の流れを確認したうえで、＜近世におけるアレ成立の可能性＞や＜現代語アレに対する先行論の問題点＞についての見通しを述べる。6節を以て全体のまとめとする。

2. アラ／アレ／ヤラ／ヤレの異形態関係

『日葡辞書』でアラ／アレ／ヤラ／ヤレをそれぞれ引くと、アラ／ヤラ／ヤレにそれぞれ、ほぼ同様の説明が見られる。その一方で、アレは掲出自体がない。

- (5) a. ARA. アラ (あら) 驚嘆, 願望, 称賛, または, 同情, 喜悅などを表わす感動詞. Aa (ああ) および Aara (ああら) の条を見よ。▶次条; Ana (あな).

Ara ara. アラアラ (あらあら) 副詞. 簡略に, かいつまんで, あるいは, 大まかに, ぞんざいに. ¶ また, 同情, 喜悅などを示す感動詞. Ara (あら) に同じ. (邦訳日葡辞書／p29)

- b. Yara. ヤラ (やら) ひどく驚いたり喜んだりする人の発する感動詞. ¶ また, 他の語の末尾につけて疑問を示す語. (邦訳日葡辞書／p811)

- c. Yare. ヤレ (やれ) 驚いた人の発する感動詞. ▶次条.

† Yare. 1, Yareyare, & c*. (ヤレ. または, ヤレヤレ, など) ¶ また, 喜ぶ人, または, 悲しむ人の発する感動詞.

† Yare. ヤレ (やれ) 卑しい人に対して用い, ‘おい, やい’ の意.

(邦訳日葡辞書／p811)

これらの記述は、基本パタンのアラ／ヤラ／ヤレが異形態の関係にあったことの傍証となろう。しかし、(1b) (3a) に見るように、基本パタンのアレが存在したことは確かであるにも関わらず、当形式のみが掲出されないのはなぜだろうか。この、辞書への掲出の問題からは、当時における各形式の定着度が必ずしも一致しない可能性が想起される。

次の表1は、アラ系感動詞の用例数をまとめたものである。なお5.2.1に詳述するように近松浄瑠璃には感動詞アレが存在するが、基本パタンのアレは見られないため対象外とする。

表1 文献資料に見られるアラ系感動詞の各用例数

	アラ	アレ	ヤラ	ヤレ
平家物語	2	0	0	0
義経記	21	0	0	0
閑吟集	12	0	0	1
山谷抄	5	1	46	0
蒙求抄	3	0	2	0
毛詩抄	5	0	3	0
天正狂言本 ^(註4)	7	0	5	0
醒睡笑	35	1	0	6
三体詩素隠抄	47	0	3	4
近松浄瑠璃 ^(註5)	24	0	2	11

アラがもっとも早く出現し、用例も全時代を通して多いことから、アレ／ヤラ／ヤレは、アラを母体として成立したと考えられる。中でも、アレの用例は明らかに少ないことが見て取れる。文献への出現状況が口語上における各形式の勢力を反映するとすれば、こうしたアレの勢力の弱さは、日葡辞書に掲出されていない事実に整合する。このように、アラ系感動詞の各形式は、それぞれ定着の度合いが異なっていたと考えてよさそうである。

3. アラの出自と異形態としてのヤラ

3.1 古代語アナを出自とするアラ

2. で述べたように、アラ系感動詞のうち最も早く出現するのはアラである。その

初出は平安期にまで遡ることができる。中川（2000）によれば、当期の用例は『落窪物語』の2例にとどまるという。この2例を以下に示す。

(6) a. あらこと／＼し。なでふ、我が家などなき所にて、御物忌侍る
(落窪物語／一 p79)

b. 辛うじてかいすゑてやるに、北の方、「あら／＼」とまどひ給へば、ねりつゝやる
(落窪物語／二 p166)

(6a) のように、アラはこの段階ですでに基本パターンを有していたことになる。これ以前の文献を調査すると、アラと形態・用法の両面において類似するアナを見出すことができる。アナは、アラ系感動詞の基本パターンを以て現れる。

(7) a. ある人のあな心なと〔痛情無跡〕思ふらむ秋の長夜を寢覚め伏すのみ
(万葉集、巻 10、2302 / p539)

b. あなおもしろ。あなたのし。あなさやけ (阿那於茂志呂。阿那多能志。阿那佐夜惣)
(古語拾遺 / p23)

(8) a. 如何すべきよにあらばやはよをもすててあなうのよやと更に思はん
(新古今和歌集、巻 18、1830 / p369)

b. 板敷のはしに立ち寄りて、聲高く、「あな、おもしろの花や」と言へば
(平中物語、134 段 / p96)

(7) は (4a) に、(8) は (4b) にそれぞれ一致する^(註7)。用例分布と用法の一致から、アラはアナの異形態として産出されたと思しい。基本パターンは本来アナがもつ後続文との典型的な共起パターンであり、アラはその性質を受け継いだものと解釈するのが穏当だろう。両形式の関係は、『日葡辞書』にも指摘されるところである。

(9) Ana.l, ara. アナ. または、アラ (あな. または、あら) 感嘆、驚愕、喜悅などを示す感動詞。
(邦訳日葡辞書 / p25)

また、江戸時代初期の話しことばや俗語を集成・考証した『志不可起』には、次のような記述がある。

(10) あらモあらおもしろナトノあらニテ、古あなト云タルトヒトシキ也
(志不可起 / 五 p215)

(9) (10) は、すでにアナが用いられない時代における、一記述者の一解釈にすぎない。従ってこれらの記事はアナがアラを生み出した直接の傍証とはならないが、当時の感覚でもアナとアラが近い関係にあったことを示唆している。

アナ>アラという仮説は、アナとアラの勢力交替の図式からも支持される。表2は、上代から中世末期にかけての資料における、アナとアラの用例数である。^(注8)

表2 アナとアラの勢力交替の様相

	アナ	アラ
万葉集	8	0
源氏物語	161	0
古今著聞集	9	3
平家物語	39	2
義経記	2	21
天正狂言本	0	7
醒醉笑	0	35
三体詩素隠抄	0	47
近松浄瑠璃	0	24

表2に挙げていないものも含め、13世紀以前の資料にはアナのみが見れる。その後、一時的にアナとアラが併存する。

- (11) a. 強盗ども此詞を聞て、「八幡殿のおはしましけるぞ。あなかなし」とて、
はう／＼逃失にけるとなむ (古今著聞集、巻9 武勇／p274)

- b. 死て後、住房の天井のうへに、おもき音なひして、落かゝる物聞えけり。
「あらくるしや」とぞいひける (古今著聞集、巻15 執宿／p394)

- (12) a. 唯一目見て、「あなこゝろ憂や」とて打臥しけり
(義経記、巻6／p279)

- b. 一目見て、「あら心憂や」とて衣を被きて臥しぬ
(義経記、巻6／p280)

さらに降って16世紀に入ると、アナは姿を消しアラのみが見られるようになる。このように、アナとアラの用例数の変遷は、言語変化の過渡的段階における典型的な分布を見せており、両者の通時的関係は明白である。

3.2 アラの異形態としてのヤラ

ヤラという形態のみに着目した場合、鎌倉期の『沙石集』に例を見出すことができるが、その用法は基本パターンに一致しない。

- (13) 「目ノ細キハワロキ物ヲ」トイヘバ、「ヤラ、カタ／＼ノ御目ハ、大キニオ
ワスルゾ」トイヒケルコソ、思合ラレ侍レ。 (沙石集、巻1／p86)

- (14) 「何ニ物殺サヌトノ給ニ、殺生ハシ給ゾ」ト云ハレテ、「ヤラ蜂カト思テ」
トゾ云ケル (沙石集、巻8 / p343)

これらのヤラは、ひとまずアラ系感動詞とは異なるものと見ておく。

一方、16世紀以降の資料に見られるヤラは、基本パタンのものがほとんどである。特に、表1に見たように抄物資料に多くの用例が見られる。

- (15) a. ヤラ奇特ヤ、何トシテ御知アタソト云レタレハ (日本書紀抄 / 78 オ)
b. 孔子一失之トハ、ヤラワルノ心得ヤト云心ソ (蒙求抄 / 六4 ウ)
c. 曇タ程ニ、ヤラ嬉ヤト云へ共フラヌ事ソ (毛詩抄 / 三39 オ)

1600年頃に成立した謡曲の注釈書『謡抄』に、ヤラの畳語形であるヤラヤラへの注釈がある。ここからは、当時の感覚においてヤラ（ヤラ）とアラ（アラ）がきわめて近いことが窺われる。

- (16) やら／＼面白 あら／＼と同心歟。あゝと云詞バ歟
(謡抄、巻3、田村 / p395)

ヤラは、アラの音変化により発生した可能性が高い。しかし、この変化は必ずしも自明というわけではない。たとえば、先行母音が狭母音であるなど、限られた環境においては $a > ya$ は一般的傾向（順行同化）として起こりうる。

- (17) a. 勘解由使殿へお渡しあれと (浄瑠璃・伽羅先代萩 / 下 p306)
b. さいぜんの雁をとりにきたほどにおわたしやれ
(虎明本・雁盗人 / 一 p64)

しかし、基本的に発話の先頭に用いられるアラの頭音がそのような環境下に置かれることはほぼない。よって、アラ > ヤラが単なる音変化によったことは、あくまで可能性の域にとどまる。可能性という点では、「ヤアラ」という形を経て、アラ（アアラ） > ヤアラ > ヤラという経路をたどったかもしれないが、^(注9) 確かなことは言えない。

- (18) a. やあら何共なや候 (謡本・三わたり / 4 オ)
b. 人の名には始而きいたやあらおもしろのなや
(幸若舞・烏帽子折 / p289)

ところで、先述したアナの衰退とヤラの定着は、時期的に重なるように思われる。この二つの現象は、関連付けて捉える必要があるのではないか。ヤラの成立・定着をアナ衰退の直接的原因とすることは慎みたいが、アラとヤラが—ラ形としてのつ

ながりを以て異形態関係を強固なものとしたことが、アナ衰退に拍車をかけた可能性は十分にある。こうした体系的要因としての発展と衰退の相互作用については、稿を改めて論じることとしたい。

ヤラの発生と定着については、具体的なプロセスを論証するには至らないが、最も無理のない解釈を施せば以上のようなようになろう。

4. アレ／ヤレの産出とヤレの定着要因

4.1 基本パタンのアレ／ヤレ

ヤラの出現とはほぼ同時に、アレとヤレの基本パタンが見られる。

(19) a. アレ上手カナン (山谷抄／四 66 ウ)

b. あれ／＼おかしや (醒睡笑／七 260)

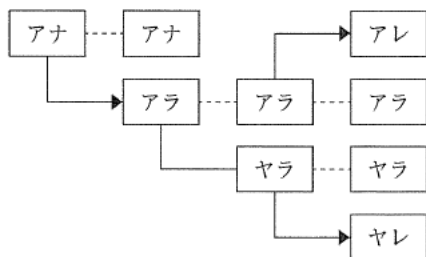
(20) a. やれ、おもしろや、えん、京には車、やれ、淀に舟
(閑吟集、65 / p157)

b. やれ／＼うれしや、まんまとだしぬひてかふた
(虎明本・財のつち／一 p112)

アレ／ヤレの基本パタンの初出は、今回の調査の範囲ではいずれも 16 世紀前半の用例が確認された。(19a) (20a) がそれに当たる。

アレはアラの異形態として、一方のヤレはヤラの異形態としてそれぞれ生まれたと考えるのが妥当だろう。ここまでの流れを図示すると次のようになる。

(21) アラ／ヤラの異形態としてアレ／ヤレが生じる過程



基本パタンのヤラ／ヤレの出現はほぼ同時期であり、ヤラ＞ヤレという順序を実証することはできない。^(注10)しかし上図のように考えれば、アラ／ヤラという一ラ形が

それぞれ一レ形を傍形として生み出すことが一律の現象として把握できる。

この後、ヤレは近世初期の狂言台本等で生産的な使用がなされる。また、(5c)のように『日葡辞書』にも掲出される。よって中世末期にヤレの基本パターンが定着していたことは明らかである。

一方アレの用例は、中世末期から近世初期を通して上に示した2例に限られ、『日葡辞書』への掲出もない。アレはヤレに対して定着の度合いが低いとみなされる。こうした相反する事態が起こった理由を考えてみよう。

すでにアラ／ヤラがある中で、アレの勢力が伸びず、あくまで一異形態として偶々文献に姿を見せる程度にとどまったことはさほど不自然でない。むしろ、ヤレが定着したことに、積極的な理由を見出すべきではないか。

4.2 二種類のヤレ

中世末期から近世初期の記述資料によれば、当時、ヤレには二種類あったことが知られる。まず、(5c)に挙げた『日葡辞書』を再掲しよう。

(22) Yare. ヤレ (やれ) 驚いた人の発する感動詞. ▶次条.

† Yare. l, Yareyare, & c*. (ヤレ. または, ヤレヤレ, など) ¶ また, 喜ぶ人, または, 悲しむ人の発する感動詞.

† Yare. ヤレ (やれ) 卑しい人に対して用い, ‘おい, やい’ の意.

(邦訳日葡辞書／p811)

前二者は本稿でいう基本パタンのヤレである。一方、後者は呼びかけに用いられるヤレであって機能を異にする。この二類の併存が江戸期にも継続されたことが、次の『志不可起』の記述によって示唆される。

(23) やれ 人ニ物ヲ云発語ニ云、又物ヲ感ジテやれ／＼ナド云

(志不可起、五／p215)

以上から、アラ系のヤレの他に、呼びかけに用いられるヤレ（以下、〈呼びかけヤレ〉）の存在が推知される。〈呼びかけヤレ〉は、すでに平家物語などに見られ、特に抄物などに多くの例が見出される。

(24) a. 「やれ子牛こでい、やれこうしこでい」といひければ、車をやれといふと心えて、五六町こそあがせたれ (平家物語、巻8／下p141)

b. ヤレ卅一粒ヲ収テ見ヨ (江湖風月集抄／上40)

c. やれまつ心をしつめてようきけ (虎明本・しやてい／下 p197)

アラ系のヤレが定着した要因は、この〈呼びかけヤレ〉の存在に求めるべきではないか。つまりアラ系のヤレは、アラ／ヤラの異形態として生じながら、一方では〈呼びかけヤレ〉の形態的支えを受けて定着したものと考えられる。具体的には以下のような推定が成り立つ。

元々、〈呼びかけヤレ〉が存在していたところにアラ系のヤレが生まれれば、二種のヤレは同音異義語として対立することとなる。同音異義語を避ける一般的傾向からすれば、むしろアラ系のヤレは斥けられる可能性もあるが、逆に同じ感動詞という範疇に属する両者が同音異義語ではなく同一語の別用法として把握される可能性もあったのではないだろうか。

このように考えれば、アレが定着せず、ヤレのみが定着した理由が説明できる。

5. まとめと今後の課題

5.1 ここまでのまとめ

ここまで、アラ系感動詞の各形式が異形態群として成立した過程を推定してきた。今後、基本パターン以外の用例を加えた精査を行う必要があるが、中世までのアラ／アレ／ヤラ／ヤレの用例はほとんどが基本パターンであり、本稿の論旨が大幅な変更を迫られることはないと思われる。ここまですべてをまとめよう。

- (25) a. 四形式のうちアラの出現がもっとも早く、時代を通して用例数が多いことから、他三形式はアラを母体としていると考えられる。このアラは、アナが変化したものであり、アラ系感動詞の基本パターンはアナの性質を受け継ぐものである。
- b. 16世紀にアラの異形態として生じたヤラが、アラとーラ形としての結びつきを強めたことにより、アナの衰退が促進された可能性が想定される。
- c. アラ／ヤラの傍形として産出されたアレ／ヤレのうち、ヤレのみが定着したのは、このヤレが元々存在する〈呼びかけヤレ〉の一用法として分析されたことによると考えられる。
- d. 結果、アラ／ヤラ／ヤレは『日葡辞書』に掲出され、ある程度の用例数も確認されるのに対し、アレは『日葡辞書』への掲出がなく、用例数もきわめて少ないという事態が生じた。

5.2 今後の課題

5.2.1 アレの定着を受け入れる条件

室町末期から近世初期にかけてアラ系感動詞として定着したアラ／ヤラ／ヤレの三形式を、形態的特徴に基づいて示せば、以下のようになる。

(26) 室町末期～近世初期に定着したアラ系感動詞

	A- 形	Ya- 形
-ra 形	アラ	ヤラ
-re 形		ヤレ

近世に至ると、アレという形式の感動詞が多く確認できるようになる。以下に挙げた近松浄瑠璃の例のうち、(27a) のようなものは指示詞「あれ」とも解釈できるが、(27b) (27c)などは感動詞と見てよいだろう。ただしこれらは基本パターンをとらない。

(27) a. アレ父様の聲がする。やがて能いこと聞かせましょ

(山崎與次兵衛壽の門松、中／上 p305)

b. アレ爰へ親仁様折が悪い先づしばし

(山崎與次兵衛壽の門松、中／上 p312)

c. アレ奥に鼓の稽古がある高い聲さっしゃるな (堀川波鼓、上／上 p40)

やや下った時期の江戸資料にも、感動詞アレは多く用いられる。

(28) a. アレ、モウ堪忍して下さりませ。お常、どうせう／＼ぞいのう

(小袖曾我薊色縫／下 p288)

b. アレくすぐつたいヨといふ聲も、忍ぶは色の本調子、さわりといふは禁句にて、しばし音じめの折こそあれ (春色梅兒譽美、巻5／p119)

ここで想起されるのは、中世末期から近世初期には定着を見なかったアレが、(26)に示した形態論的システムの空き間に適合する形で、改めて勢力を伸ばした可能性であるが、近世期のアレに基本パタンのものは多くなく、今回の調査では (28b)に挙げた例に留まる。

従って、(27) (28) のアレをただちにアラ系感動詞とみなすことはできない。むしろこのアレが、アラ／ヤラ／ヤレとは出自を異にする可能性も考慮に入れる必要があろう。しかし、アレという形式の出自がどこにあるにせよ、産出されたその形式が、ヤラ：ヤレ (Y- 形) に対するアラの傍形として、またアラ：ヤラ (-ra

形)に対するヤレの傍形として当時の言語体系の中に組み込まれうる下地は、十分に整っていたと言ってよい。

本稿では、形式としてのアレ産出という‘改新’^(注11)のレベルの問題に対する十全な説明は施しえないが、その形式の体系への‘採用’に関わる一条件として、(26)の形態論的システムを提示しておきたい。

5.2.2 現代語感動詞アレの出自に関する問題

アレの問題は、現代語における感動詞アレの成立に関する議論にも影響を及ぼすと考えられる。現代語アレは、次のようなものである。^(注12)

- (29) a. あれ！指切っちゃった。
b. アレ、アレ、これは困った子ね。

この感動詞の成立について、従来の見解では、指示詞出自との見方が強い。指示詞と感動詞のつながりを早くに指摘した安田(1928)は以下のように述べる。

- (30) 多くの名詞から感動詞に転ずるのはあまり規則的ではなく、むしろ転ずるといふより、その品詞中の感動詞的用法と見る方がよいかも知れぬが、代名詞だけは、法則的である。

近年では、こうした形態的一致のみを根拠とした素朴な見方から、次に挙げる織田(1994)のように、指示詞「これ／それ／あれ」というパラダイムが統一的原理により感動詞化したことが主張される(織田氏の説を私に要約)。

- (31) a. 「これ」の感動詞化：目撃状況内で進行する現前の行為に対する強い注意の喚起が「コ」系指示詞の選択となっている。
b. 「それ」の感動詞化：聞き手のこれまでの行為に対する注意喚起、聞き手との間に了解されている行為への促しが、「ソ」系指示詞の感動詞への転用となっている。
c. 「あれ」の感動詞化：予期せざる突発事件に対する驚きの気持ち、また予想外の事態への展開に対する狼狽など、日本語「ア」系指示詞の「遠」存在、「外」存在への指示機能から、感動詞へと転用される。

この説明原理(認知的概念拡張)による把握の仕方は、「これ／それ／あれ」がパラダイム単位で感動詞へと移行したことを一つの原理で説明できるため、一見説得的であるように感じられる。しかし、「コレ／ソレ」が‘注意が向けられる方向’と

いう点において指示詞との関連を見出せるのに対し、「アレ」の説明は、やや飛躍的な見方である。こうした無理が生じるのは、指示詞＞感動詞というプロセスを無批判に前提することで、次に挙げる(32a)の議論を経ず、(32b)のような演繹的な発想の下、論理が展開されることの弊害といえる。

- (32) a. コソア型感動詞はそれぞれ何を出自としてどのように感動詞化したか
b. 指示詞「これ／それ／あれ」の意味とコソア型感動詞の意味をいかに合理的に結び付けるか

そもそも、聞き手に向けられる「コレ／ソレ」に対し、「アレ」は話し手の感情表出に用いられる。両者が根本的に性質を異にしていることは、どのように解決されるべきであろうか。

先行論はいずれも現代語の共時態のみを対象としたものであり、近世のアレおよび、中世末期のアラ系のアレには目が向けられていない。現代語アレとアラ系のアレはともに話し手の感情表出する感動詞である以上、この点を視野に入れた再検討が必要となろう。

筆者は、現代語アレについて、アラ系感動詞との関係において生じたアレが、コレ／ソレが織りなす指示詞系感動詞群の一部として異分析されたものと想定している。このように見れば、通時的過程としてのアレの成立と、現代語の共時的分析によって得られるコレ／ソレ／アレと指示詞の連続性を、経緯と結果の関係として整合的に捉えられる。詳細は稿を改めて論じることとしたい。

6. おわりに

本稿では、中世末期に四形式のアラ系感動詞が併存する特異な現象を取り上げ、各形式の成立と定着の様相を巨視的に把握することを試みた。アラ系感動詞のうち新たな形式が生み出されるプロセスは音変化という一般的傾向によるものであり、その定着は体系内的要因に支えられるものである。本稿の目的であるアラ系感動詞群成立の概観は大枠において達成されたが、個々の事象の説明にあたっては実証性を欠く部分も少なくない。今後、基本パタン以外の用例を含めたより微視的な課題へのアプローチによって実証性を高める必要がある。

また、アラ系感動詞群が構築される過程を追うことで、近世以降の段階で感動詞アレが定着しうる土壌が整っていたことが、現象として整理された。本稿の成果は、

アレを指示詞出自と前提する先行論への批判的再検討の基盤となる。その意味で本稿は、‘指示詞の感動詞化’という現象を考察する端緒となるものである。

注

- (1) 中川(2001)では、アラをはじめとした一部の感動詞を、「後続成分と緩やかながらも一定の関係がみられる」ものとしているため、これをアラのとり「構文類型」とする。筆者の考えでは、アラ系感動詞とその後続文の典型的パターンは、単に共起しやすいものにすぎない。
- (2) アラアラ／アレアレ／ヤラヤラ／ヤレヤレといった量語形も同様に扱う。また、ヴァリエーションの範囲で捉えられるものもこれに含める。たとえば、(4a)(4b)の場合、終助詞「ヤ」を伴わない場合がある。これは、中世の用例にはほとんど見られない。平安期には「あらこと／＼し」(落窪物語／一 p79)など、江戸期には「やれこと／＼し」(平家女護嶋／下 p299)などが見られる。あるいは「あらありがたの御事やな」(虎明本・ぢごくぞう)のように「ヤナ」となる場合もある。その他、「アラハヤイ返事ヤト怪ソ」(毛詩抄／四 13 オ)のようなくアラ＋形容詞連体形＋名詞＋ヤ>のような例なども同様に基本パターンとみなす。アラ系感動詞と形容詞語幹もしくはヤ／カナが共起するものは、原則としてこれに含めた。
- (3) 森田(1973)では、「『あれ』は『あら』から来たものか指示代名詞の転成かさだかでない」と可能性の提示がなされる。しかしこれ以上の具体的な論及はされていない。
- (4) 天正本については東国方言との関連も指摘されており、他資料と同等に扱うことには注意が必要である。しかしここでは、大蔵流虎明本(1642)をはじめとする、近世初期に上方で書写された他狂言台本を見ても、アラ／ヤラ共に用いられていることから、天正本に特殊な点があるとは思われない。また、ヤラ5例のうち4例が、節部分における「やら／＼めでたや／＼な」に集中する。こうした部分は、狂言台本の中でもきわめて固定的に伝承されており、現に全く同じ詞章が他台本にも見られる。従ってこれらの例は特に、天正本以前にヤラが存在したことを強く示唆するものである。
- (5) 『日本古典文学大系』収録の20篇(世話物14篇・時代物6編)の用例数を合計。
- (6) 山谷抄に限っては、ヤラの用例数がアラを圧倒的に上回っている。この資料では、ヤラ全46例のうち21例が「ヤラシヨウ(支要)ヤ」という例に集中しており、その慣用性が顕著である。ただしこの用例を除いてもアラ5例：ヤラ25例であり、ヤラの勢力が強いことに変わりはない。表に挙げていない資料でも、アラ<ヤラというものは少なく、この用例分布はやや特殊といえる。本稿では、その理由までは明らかにしない。
- (7) ただし、中川(2001)で指摘されるように、(4a)に相当するものは、ヤを伴わない

例がきわめて多い。また、(4c)に相当する用例は、アナの場合ほとんどない。

- (8) 『古今著聞集』に9例見られる「安奈尊(あなたふと)」は、楽曲名であるため除いた。また、「あなかしこ」が『源氏物語』で12例(うち1例は「あなかしこや」)、『古今著聞集』で3例見られる。これらは慣用句とも思われるが、形態的には基本パターンに一致しているため用例数に含めてある。
- (9) 「やら／＼ハ私謂やあら／＼ノ畧ナラン、ヤハトカク自然ノ声ニテ文字ハナカラン」(志不可起、五／p215)
- (10) ただし、ヤレの初出である(20a)「ヤレ、おもしろや、えん、京には車、ヤレ、淀に舟」(閑吟集)は、拍子をとる感動詞とされている。この例を除けばヤレの出現はヤラよりも降ることとなる。
- (11) E. コセリウ／田中、かめい共訳(1981)。
- (12) (29a)は金(2006)より、(29b)は織田(1994)より引用。

使用文献

- | | |
|-----------|-------------------------------------|
| 万葉集 | 『新日本古典文学大系 第2巻』岩波書店 |
| 古語拾遺 | 西宮一民校注(1985)『古語拾遺』岩波文庫 |
| 謡本 | 表章編(1997)『観世文庫蔵 室町時代謡本集 影印編・翻印編』 |
| 謡抄 | 『日本庶民文化史料集成 第3巻』三一書店 |
| 江湖風月集抄 | 『抄物大系 江湖風月集抄』勉誠社 |
| 山谷抄* | 『続抄物資料集成 第6巻』清文堂出版 |
| 三体詩素隠抄 | 『抄物小系9 丁丑版 三体詩抄I～VII』 |
| 詩学大成抄 | 『新抄物資料集成 第1巻』清文堂出版 |
| 中華若木詩抄 | 『新日本古典文学大系 第53巻 中華若木詩抄・湯山聯句抄』岩波書店 |
| 日本書紀抄 | 小林千草(2003)『清原宣賢講「日本書紀抄」本文と研究』勉誠出版 |
| 蒙求抄* | 『抄物資料集成 第6巻』清文堂出版 |
| 毛詩抄* | 『抄物資料集成 第6巻』清文堂出版 |
| 天正狂言本* | 内山弘編(1998)『天正狂言本 本文・総索引・研究』笠間書院 |
| 大蔵流虎明本 | 『大蔵家伝之書 古本能狂言 第1～3巻』臨川書店 |
| 天草版伊曾保物語* | 『天草版イソボ物語』勉誠社 |
| 幸若舞 | 笹野堅編(1943)『幸若舞曲集 本文』第一書房 |
| 醒睡笑* | 岩淵匡編(1982)『醒睡笑 静嘉堂文庫蔵 本文編[改訂版]』笠間書院 |
| 志不可起* | 『近世文学資料類従 参考文献編7 志不可起』勉誠社 |
- ※その他はすべて、岩波日本古典文学大系を用いた。また、*印をつけたものの調査には各種索引類を利用した。

参考文献

- 織田稔 (1994)『直示と記述同定—英語固有名の研究—』風間書房
- 金善美 (2006)「コ・ソ・アと i・ku・ce の感情的直示用法と間投詞的用法について」(『言語文化』8-4)
- 中川祐治 (2000)「古代語における感動詞の構文的機能と特徴について—副詞との連続性の視点から—」(『広島大学教育学部紀要 第二部』第 49 号)
- 中川祐治 (2001)「中世語における感動詞の構文的機能と特徴について—原拠本『平家物語』と『天草版平家物語』との比較を中心に—」(『広島大学日本語教育研究』第 11 号)
- 森田良行 (1973)「感動詞の変遷」(『品詞別日本文法講座 6 接続詞・感動詞』明治書院)
- 安田喜代門 (1928)『國語法概説』中興館
- E. コセリウ／田中克彦、かめいたかし共訳 (1981)『うつりゆくこそことばなれ』(クロノス)

付記

本稿は、2009 年 9 月にカレル大学で開催された国際シンポジウム『日本語テキストの歴史的軌跡 解釈・再コンテキスト化・布置』(GCOE プログラム「テキスト布置の解釈学的研究と教育」第 8 回国際研究集会)における発表原稿を改編したものである。

また本稿は科研費(特別研究員奨励費 21-55272)の助成を受けたものである。

(ふかつ・しゅうた／日本学術振興会特別研究員)